

第百八十二話 戦略調整なき同盟は同盟にあらず！

日独伊三国(軍事)同盟 (1940(S15)年9月27日調印)は、日本の作戦に如何なる影響を与えたのか？真の軍事同盟だったのか？

1 三国同盟の概要

三国同盟は、欧州戦及び日支事変に参戦していない国からの攻撃に対する相互軍事協力を約したものである。日本にとっては米国を牽制し、支那事変を有利に解決する狙いがあった。同じく、独にも米国が英国側で参戦すれば欧州正面と太平洋正面での二正面作戦を強いることとなり、米国の参戦防止が期待できるとの思惑があった。締結には積極、消極両派の闘ぎあいがあったが、結局は、“バスに乗り遅れるな”の大合唱に押されてしまった。第3条の自動参戦条項は事実上空文化することで決着はしたが・・・。何れにしても、同盟締結は、米国の対日警戒感をより高めたのは事実である。



尚、1942(S17)年1月18日日独伊軍事協定が締結、作戦区域の区分を東経70度線として相互協力することとされた。

2 軍事的連携(共同作戦)について

- (1) 初期進攻作戦での香港攻略、マレー・シンガポールの攻略は独にも益した。
- (2) 1941(S16)年6月22日独は、ソ連に奇襲攻撃を開始した。独は日本のソ連連携攻撃を期待していた。松岡外相や陸軍の一部ではこの機に一気に北方問題を解決すべきとの論もあったが、最終的には「熟柿北方論」に落ち着いた。

(3) 初期進攻作戦後の対独連携

陸軍、海軍軍令部、連合艦隊の密接な戦略調整なきままに、混迷要因を孕んだ「今後採るべき戦争指導の大綱」が1942/3/7決定された。

陸軍は、爾後の作戦として、英国への打撃、重慶政府への打撃から、セイロン占領が有効だろうと判断していた。ここに、インパール作戦の萌芽がみられる。陸軍は、印～西亜打通を行って、アフリカでの日独提携を企図していたのだろう。然しながら、この壮図も、大戦の転回点の一つとも云われるエル・アライメンの戦い(1942/7～11)でロンメルが敗れたことにより、夢と潰えた。

(4) その後、英国とアジアの連絡遮断のためにインド洋作戦が行われた。

セイロン沖作戦(通商破壊作戦を要請されて、1942/4月5～9日、英空母等を撃沈)、マダガスカル島の戦い(マダガスカルに逃走した英海軍艦艇攻撃1942/5/31 第三十話関連)、その他、日本海軍潜水艦による通商破壊作戦(遣独潜水艦作戦)と日独の協力による通商破壊作戦等を行った。日伊連絡飛行も行われた。独は、日本にインド洋派遣の強い要請を行ったが、日本には熱意がなく、日独間に不協和音が生じ始めた。

*こうしてみると、三国同盟は軍事同盟というより政治宣言に近いもののような気がするのだが、どうだろう。

3 日独連携の評価

- (1) 軍事同盟ならではの密接な戦略調整が為されていなかったのは、問題だ。日本が独の実情を知らず、独は対ソ重点で日本の対ソ参戦を臨み、日本はまず英屈服を狙って中近東での日独連携を望んでいた。
- (2) 日独が連携しようにも地理的に余りにも懸隔しており、実質的な軍事的連携は期し難かったと考える。
- (3) 米国に、欧州と太平洋という二正面作戦を強いたという点では効果があった。
- (4) 本同盟の狙いが米国参戦の牽制・抑止・防止であるならば、日米英蘭戦開始で同盟無用になったとも云える。

*連合(共同)作戦と云うには余りにもお粗末な日独連携だ。